



リスクを理解するための教育

●
安井 至 Itaru YASUI

独立行政法人 製品評価技術基盤機構 理事長



福島第一原発の事故では、『想定外』という言葉が説明に使われた。過酷事故が起きた場合、いくら「原子力賠償法に賠償額の上限金額がある」、「異常に巨大な天災地変の場合には免責される」と書かれていても、法律は万能ではない。万一のときには、国有化されることもありうる、というリスク発想はなかったのだろうか。

原発再稼働の議論を聞いていると、「原子力規制委員会の基準は『安全基準』ではない。むしろ『危険基準』である。なぜなら、一定確率で事故が起きることを想定しているから」、といった論調であることが多い。絶対的な安全はないという主張のようにも聞こえるが、同時に、100%安全以外のものは許容しない、というようにも聞こえる。

ほぼ克服されたが、化学物質による被害の歴史は古い。しかも、世界の中でも、最も特異な歴史を持っている国がこの日本である。水俣湾に放出されたメチル水銀が、水俣病の原因ではないか、と指摘された後でも、かなり長期間放出が続き、1968年になってやっと止まった。その時は、高度成長期の最中にあり、経済最優先主義であったこともあって、もしこのプロセスが原因として、社会的責任を追求されたらどうなるのか、というリスク発想はなかった。その後、50年に及ぶ時間が流れた。しかし、相変わらず、「安全」と「危険」を二項対立的に理解していて、確率でそれを表現するリスク発想はない。よく言われるように、「0か100か」の判断しかできない。

この状況をこのままで良しとすべきなのだろうか。決してそうは思えない。一体どうやってリスクの概念を教育すべきなのだろう。いろいろな方法が有りうるだろうと思う。

そもそもリスクという言葉は、保険業界から出てきたとされている。MS&AD インシュアランスグループの新卒採用グループのWebサイトに、「リスクと損害保険」の記事があり、リスクの語源について語られている。引用すると、アラビア語で、リスクは「明日の糧」を表す言葉として使われてきました。リスクとは、単に危険を意味するものではなく、未来の夢を持ち挑戦する過程で危険や損失が生じる可能性という意味で使われます、とある。確かに、保険の確率論を教育することも一案ではある。

しかし、「明日の糧」という言葉には、もっと本質的なことが含まれている。すなわち、未来を読むことの重要性である。これをしっかりと教育すべきである。

地球環境問題、特に、気候変動や食糧問題は、「明日の糧」の教材として最適である。研究者達も、気候変動の包括的なリスク情報を創成するという方向に変わっているので、やっと、中高の教育用に使えるような情報が増えつつある。人類の未来は、リスク思想で正しく考える若者達に自分で決めてもらう以外に方法はないのである。

© 2013 The Chemical Society of Japan